藤本　さつき　　*FUJIMOTO Satsuki*

≪畑惠子先生を送る言葉≫

畑先生とダイバーシティ

Professor Hata and Diversity

「ここに畳があることが、この組織に本当に必要ですか？」
これは、畑先生が初めて西早稲田キャンパスの男女共同参画推進室（当時）を視察された際に私に投げかけられた言葉でした。

私が畑先生のもとで仕事をすることになったのは、2014 年 12 月の人事異動で男女共同参画推進室に来てからのことです。当時の担当理事が畑先生でしたが、先生ご自身も 9 月まで社会科学総合学術院長を務められ、11 月の理事会発足にあたり男女共同参画推進担当になられたばかりでした。そこでまず、事務所の現状を視察されたいとのことで、私たちのいる西早稲田キャンパス 60 号館 2 階事務所にいらっしゃいました。

私はそこで他の 4 人のメンバーと仕事をしておりましたが、その事務所は約半分のスペースに 10 畳ほどの畳が敷き詰められ、「ワークライフバランスサポートセンター」としての機能を担っておりました。これは女性研究者支援の一環として、小さいお子さんを連れた方が気軽に利用できるような仕様にしてあったのですが、そのような目的と事務機能が併存していることに対しての違和感を、畑先生は一目見て指摘され、冒頭のお言葉になったのだと思います。先生のご指摘のとおりで、畳部分は 2007 年に事務所が開設されて以来、ほとんど利用されていなかったのですが、私達がそれを疑問に思う目を持たずにいたことを一瞬で気づかされた出来事でした。

その後、件の畳も撤去され、60 号館 2 階事務所自体も大隈会館 2 階に移され

ますが、畳のエピソードは畑先生の物事の本質を見抜く洞察力を象徴的に表したエピソードだと思います。そのことに加え、組織の名称として、またご自身の理事としてのお役職であった「男女共同参画」を「ダイバーシティ」に変えた方が良いという先進的な考えも、理事就任当初からお持ちでした。しかし、当時は他大学でもダイバーシティを名乗る組織はほとんどなく、国や行政機関の多くは「男女共同参画」を使っておりましたことから、ダイバーシティに変えると活動内容がわかりにくくなるのではないか、という意見が学内外からありました。わかりにくいのであれば、わかりやすくすればいい、ということで、早速当時の推進室長であった矢口徹也先生を中心に、男女共同参画からダイバーシティへの組み変え作業として組織改編と活動のコンテンツ作りをさせていただいたのですが、ダイバーシティで行く、という畑先生のゆるぎない信念があったからこそ、不安視された名称変更が自信を持って達成できたのだと思います。

また、畑先生は一貫して、言葉の意味に対する「こだわり」をお持ちでした。これはご任期中の大仕事でありました「スチューデントダイバーシティセンター発足」「早稲田大学ダイバーシティ推進宣言」の策定に伴う場面で、担当理事として学内外への説明する機会も多かったのですが、どのような場合でも、説明用の原稿を事務側に頼むのではなく、ご自分でまとめられるのが畑先生流でした。事務側が行う作業負担への配慮もあったのだと思いますが、ご自身がお話される言葉に対する責任感だったのだと思います。さらに、ダイバーシティ推進宣言の文案自体を起草されたのが畑先生ご自身でした。「宣言」ですので、ひとつひとつの言葉の意味、重みが慎重に検討される作業でしたが、畑先生の言葉を大切にする姿勢があったからこそ、早稲田大学として、末永く継承していくことができる誇り高い宣言文となったと思います。

最後に、ダイバーシティ推進には女性の活躍という大きな柱がありますが、その推進のためにはロールモデルの存在が大きな影響力を持ちます。畑先生は当時の理事会に 2 名しか存在しない女性として、仕事への向き合い方だけでは

なく、周囲の教職員への関わり方など、とてもしなやかにこなしていらっしゃいました。少しおこがましいとも思いますが、畑先生は私にとってのロールモデル的な存在でもありました。ほんとうにお仕事をご一緒できて幸せな日々でしたことを、この場をお借りしてお伝えしたいと思います。